

荒木山への道

荒木山西塚古墳発掘調査の全記録

西の明日香村コンソーシアム

例言

1. 本書は、岡山県真庭市^{まにわ かみみず た}上水田にある荒木山西塚古墳の発掘調査に関する活動記録集である。
2. 「西の明日香村コンソーシアム」は、真庭市北房^{はくぼう}地域における文化遺産の調査、研究および保存活用等に関する取り組みを行うことで「西の明日香村づくり」を推進することを目的に、真庭市北房振興局、真庭市教育委員会、同志社大学文化遺産情報科学調査研究センターおよび北房文化遺産保存会が協議・調整を図りながら連携した活動を行うために設置された組織である。
3. 本書の編集作業は、真庭市北房振興局 嶋田有一郎、真庭市教育委員会 新谷俊典、同志社大学 津村宏臣、北房文化遺産保存会 畦田正博および平城元が担当した。
4. 年号については、元号表記を原則とし、多くの場合（ ）内に西暦を併記した。
5. 本書に係る活動履歴の一覧を「資料編」資料1に示す。
6. 文中のCKSCHは、同志社大学文化遺産情報科学調査研究センターの略称である。
7. 北房文化遺産保存会（旧荒木山の古墳を顕彰する会）の年度は、1月1日～12月31日である。
8. 文中における真庭市および真庭市教育委員会職員は、当時の役職名とした。
9. 文中の著書名については『 』内に示す。
10. 寄稿文等において「保存会員」とは、北房文化遺産保存会会員を指す。また、保存会員で（ ）内に示す在住市町名がない場合は、真庭市の北房地域在住者である。
11. 資料編に掲載の資料には抜粋資料を含む。



岡山県真庭市北房地域

序文

北房^{ほくぼう}地域には、「大谷・定古墳群^{おおや さだ}」をはじめとする250基以上もの古墳が存在しています。この豊かな文化遺産を生かし、旧北房町時代から「西の明日香村構想」を掲げ、古代遺跡をまちづくりへと結びつける取り組みが行われてきました。

今回、荒木山西塚古墳の発掘調査が実現した背景には、北房文化遺産保存会の皆さんを中心とした地元の熱意ある取り組み、そして、同志社大学文化遺産情報科学調査研究センター長である津村宏臣准教授にご尽力いただきながら開催した「真庭市歴史郷育講座」の存在があります。これらが結びつき、地元住民の皆さんのご理解とご協力も得ながら、荒木山西塚古墳の調査が始まりました。地域の想いに行政が共鳴し、発掘へとつながったことは、大きな意義を持つものです。

また、この発掘は市民参加型で行われ、専門家だけでなく地域の皆さんと共に汗を流しながら歴史の謎に迫る、貴重な学びの場ともなりました。この経験は、その後の小中学校と同志社大学との協働による「郷育^{きょういく}※」の取り組みに結びつき、地域の子どもたちが自らの住む土地の魅力について学び、考え、そして誇りを育む重要な土台となっています。

文化遺産は、地域に住む人々が主体的に関わり、その価値を見出し、活用してこそ、はじめて未来を支える力となります。「北房地域振興計画」にも掲げられたロマンと郷愁にあふれる「西の明日香村づくり」は、まさに地域の皆さん一人ひとりの思いと行動によって形づくられていくものであり、一朝一夕に成し遂げられるものではありませんが、地域を愛し、その魅力を最大限に引き出そうとする姿勢こそが、将来の北房を支える確かな礎であると信じています。

今後も、地域の皆さんが手を取り合い、地域の力を高めていく取り組みが一層広がっていくことを期待しています。大切な地域資源である文化遺産を未来永劫連綿と紡ぐこの歩みが、さらなる活力と誇りになることを心から願っています。



真庭市長 太田 昇

※真庭市教育大綱にうたわれている言葉で、「ふるさとを知り、ふるさとへの思いを育てる」こと。身近にある豊かな自然と、それに由来する文化、歴史、産業などに興味をもち、知ることを出発点とし、真庭市の自然や風土の中での体験や経験を通じて、ふるさとに対する愛情と誇りを育てる取り組み。

発刊によせて

松木武彦

荒木山西塚古墳発掘調査ワーキンググループ
第1回会議（令和4年8月29日開催）開会のあいさつより

本日は、日本の考古学、地方史といった文化分野の発展にとって記念すべき日です。ここ10年来、世界的に考古学の、特に遺跡を取り巻く状況が大きく変化しています。2018年、京都で世界考古学会議が開催されました。これを一つの契機として、遺跡は誰のものか、歴史はどうやって誰が作っていくのかということが、考古学の世界でも深く議論されるようになってきました。

それと軌を一にするかのように、考古学の専門家以外の様々な人たちが、古墳に価値を見出し、アート、アミューズメント等で古墳の多様な価値を多様なやり方で引き出していくという動きが出てきています。つまり、古墳は専門家だけのものではなく、私たちみんなのものであるということが、社会の様々な人々によって意識され、多様な人々によって多様な方法で、未来に向けて文化財を守っていくのだという動きが活発になってきているのです。

今回の「荒木山西塚古墳」の取り組みは、地元市民が古墳の解明や価値の抽出に主体的に関わっていかうという試みです。約70年前には同じ岡山県北部の、「月の輪古墳」を近藤義郎先生たちが主導されて発掘しました。当時、市民の手に歴史を取り戻すという一つの大きなムーブメントが起こっていた時の市民による運動、調査が、奇しくも同じ吉備の北部で行われるということに、不思議な符合のようなものを感じます。70年後の真庭市で、先端的取り組みがこれからスタートするということは偶然ではなく、岡山県北部の伝統的的市民文化というものに関わっているのだと思います。

この度の試みに対して大いに期待する者として、ひと言ご挨拶させていただきました。



国立歴史民俗博物館・総合研究大学院大学教授の松木武彦先生におかれましては、令和6年（2024年）9月21日にご逝去されました。

令和4年2月に北房で開催した「西の明日香村歴史講演会」での講演のため来訪いただいた際、市民参画の発掘調査の意義を感じ、プロジェクトへのご協力を快諾いただきました。そして、荒木山西塚古墳発掘調査に際して、専門家で構成されるワーキンググループの座長として発掘調査を学術的に導いていただくとともに、常に温かい眼差しで私たちを見守ってくださいました。

松木先生のご冥福を心からお祈りするとともに、遺跡と市民との関わりに寄せた松木先生の思いを大切に受け継ぎ、今後も北房での取り組みを続けてまいります。

目次

序文	太田 昇
発刊によせて	松木武彦
まえがき	嶋田有一郎・平城 元

第1章／発掘調査決定に至る道 平成28年～令和2年

1. 「荒木山の古墳を顕彰する会」誕生	畦田正博	1
ほっておけんぞ！ 荒木山	久松秀雄	3
2. 古墳の測量・物理探査決定	平城 元	5
3. 北房公民館講座「まに大附属ふるさと研究所」	津村宏臣	6
（1）連携事業の始まり		6
（2）真庭市歴史郷育講座「文化遺産を活用した人づくり・地域づくり」		7
（3）平成30年度「第Ⅰ期 まに大附属ふるさと研究所」		10
（4）令和元年度「第Ⅱ期 まに大附属ふるさと研究所」		18
（5）令和2年度「第Ⅲ期 まに大附属ふるさと研究所」		25
4. 「市長と話そう！」	畦田正博	32
民・官・学の発足—市長と話そう！—	戸村彰孝	32

第2章／発掘調査に至る道 令和2年～令和4年

1. 真庭市教育委員会・同志社大学の動き	新谷俊典	35
（1）令和2年度		35
（2）令和3年度		36
（3）令和4年度		36
2. 北房振興局の動き	嶋田有一郎	39
（1）北房地域振興計画		39
（2）史跡の看板やマップ作成		39
（3）発掘調査に向けて		39
3. 北房文化遺産保存会の動き	平城 元	40
（1）「北房文化遺産保存会」としての新たなスタート		40
（2）「西の明日香村・道しるべ整備事業」		40
（3）発掘調査に向けて準備を加速		41

第3章／発掘調査 令和4年～令和6年

1. 第1次発掘調査	新谷俊典	45
(1) 発掘調査参加者		46
(2) 北房文化遺産保存会班編成		47
発掘班	平城 元	47
記録（広報）班	奥田健治	49
遺物・機材班	小林展弘	52
生活・安全班（第1次発掘調査）	畦田正博	53
生活・安全班（第2次発掘調査）	上谷仁志	54
案内・庶務班	志田浩一	56
(3) 北房文化遺産保存会員・一般参加者寄稿		57
第1次発掘調査に参加して	山崎和光	57
荒木山に来て、見て、知ったこと～発掘作業に参加して～	延原 泉	58
まだ見ぬ北房の姿	森田陽介	60
ワクワク発掘体験	大田 恵	61
古墳掘る（その1）	天野光暉	61
第1次発掘調査ふりかえり	三輪能章	62
荒木山西塚古墳の発掘から得た学びと繋がり	板東郁仁	64
古墳発掘に参加させてもらって	齋藤真理	65
古墳に魅せられて	乙部憲彦	66
(4) 報道機関記者・大学・真庭市職員・サポーター寄稿		68
無題	小畑 誠	68
市民参画型の発掘調査に参加して	鈴木崇司	68
「西の明日香村」が導く縁	上島芳広	69
荒木山西塚古墳発掘調査に携わって	江崎 仁	70
北房に導かれて	大久保孝晃	71
荒木山西塚古墳の調査について	平井典子	71
無題	白石 純	72
荒木山西塚古墳の発掘調査とその意義	岩本 崇	73
調査をふり返って	尾上元規	73
(5) 作業参加日誌より		74
2. 第2次発掘調査に向けて	平城 元	81
3. 第2次発掘調査	新谷俊典	83
(1) 発掘調査参加者		84
(2) 北房文化遺産保存会員・一般参加者寄稿		84
発掘作業への参加と生活・安全班の担当として	畦田恵子	84
第2次発掘調査に参加して	梶上 守	85

荒木山西塚古墳発掘調査に参加して思うこと	山本杉生	86
古墳掘る（その2）	天野光暉	87
一人でも、初心者でも	山崎美和子	87
荒木山古墳発掘調査に参加して	河相祐子	88
荒木山西塚古墳の発掘調査に参加して～まさに、令和の「月の輪古墳」～	網本善光	89
古墳発掘調査に参加して	原田益美	90
未来は明るい	山本 肇	91
発掘の先に見えたもの～北房での学びと気づき～	山崎弘大	92
古墳の発掘に参加して	畦田悠正	93
古墳の発掘に参加して	畦田真理	94
そして、保存会は踏ん張った	平城 元	94
発掘作業の総括として	畦田正博	97
（3）報道機関記者・大学・真庭市職員・サポーター寄稿		97
無題	小谷章浩	97
真摯な熱意を刻むーレンズ越しに辿る古墳の記憶	鈴木健司	97
荒木山西塚古墳の発掘調査を通して	西村航希	98
荒木山西塚古墳の発掘調査を通して	大塚清文	98
わかったことと新たな課題	行田裕美	99
北房にパブリックアーケオロジーの最前線が	松田 陽	100
地域主体の市民参加型考古学の発展に期待	松本直子	100
（4）作業参加日誌より		101
4. 真庭市立北房小学校・北房中学校郷育事業（1）	津村宏臣	105

第4章／「西の明日香村」北房に向けて 令和6年～

1. 北房文化遺産保存会「西の明日香村づくり」	平城 元	113
（1）西の明日香村検討委員会		113
（2）西の明日香村実行委員会		114
2. 西の明日香村コンソーシアムの取り組み	嶋田有一郎	118
（1）西の明日香村づくりと郷育		118
（2）学校現場との協働		120
（3）協働の輪試行錯誤		121
3. 真庭市立北房小学校・北房中学校郷育事業（2）	津村宏臣	123
あとがき	津村宏臣	132
編集後記		133

資料編

資料1	活動履歴一覧	136
資料2	「荒木山の古墳を顕彰する会」活動記録	140
資料3	真庭市歴史郷育講座「文化遺産を活用した人づくり・地域づくり」チラシ	141
資料4	「北房通信」令和2年9月1日発行	141
資料5	市長と話そう！ 開催案内	142
資料6	市長と話そう！ 参加者名簿	143
資料7	市長と話そう！ 資料①「活動のあらまし」	144
資料8	市長と話そう！ 資料③「荒木山西塚、東塚古墳の調査概要報告」	146
資料9	市長と話そう！ 資料④「荒木山の古墳の顕彰活動」	149
資料10	西の明日香村歴史講演会「荒木山古墳とその時代」チラシ	150
資料11	真庭市西の明日香村コンソーシアム設置要綱	150
資料12	荒木山西塚古墳発掘調査サポーター設置要綱	151
資料13	荒木山西塚古墳発掘調査ワーキンググループ設置要綱	152
資料14	荒木山西塚古墳発掘調査ワーキンググループ第1回会議	153
資料15	「北房通信」令和4年9月1日発行	162
資料16	一般参加者募集チラシ	162
資料17	発掘調査のしおり	163
資料18	発掘作業の手引き	172
資料19	発掘調査事業準備会第2回	176
資料20	第3回準備会	181
資料21	コンソーシアム第4回連携会議	183
資料22	コンソーシアム第5回連携会議	186
資料23	役割分担・スケジュール表	188
資料24	発掘調査に向けた10のこと	189
資料25	作業班全体表	193
資料26	日別班編成	194
資料27	班編成と作業内容	194
資料28	【参考】荒木山西塚古墳発掘調査組織図	196
資料29	スケジュール表	197
資料30	現場（山）作業チェック表	198
資料31	平地作業チェック表	198
資料32	ミーティングの司会・進行	199
資料33	注意事項	199
資料34	クラブハウスでのお願い	200
資料35	見回り編成表	200
資料36	見回りチェック表	201

資料37	作業参加日誌	201
資料38	「北房通信」令和4年12月1日発行	202
資料39	現地説明会チラシ	202
資料40	現地説明会配布資料	203
資料41	西の明日香村・道しるべ整備事業	204
資料42	コンソーシアム第11回連携会議	205
資料43	コンソーシアム第12回連携会議	208
資料44	「北房通信」令和5年12月1日発行	210
資料45	西の明日香村フォーラム&現地説明会チラシ	210
資料46	現地説明会配布資料	211
資料47	西の明日香村フォーラム パネルディスカッション	213
資料48	「北房通信」(裏面記事)	213
資料49	「西の明日香村づくり」アンケートのまとめ	214
資料50	ビジョンおよび目標達成のための手段・方策	218
資料51	第1次中期計画・令和7年度事業計画一覧	219
資料52	「すげーの一、谷尻遺跡」展示・記念講演チラシ	220
資料53	「第2回西の明日香村 北房フォーラム」チラシ	220
資料54	荒木山西塚古墳発掘調査ワーキンググループ第2回会議資料	221
資料55	住民の発案で古墳を発掘	225
資料56	西の明日香村コンソーシアム第9回連携会議	225
資料57	荒木山西塚古墳発掘調査ワーキンググループ第3回会議資料	226
資料58	第2次荒木山西塚古墳発掘調査ワーキンググループ第1回会議資料	230
資料59	西の明日香村コンソーシアム第6回連携会議	234
資料60	西の明日香村コンソーシアム第7回連携会議	235
資料61	西の明日香村コンソーシアム第8回連携会議	235
資料62	荒木山西塚古墳発掘調査(第1次)概要報告	236
資料63	第2次荒木山西塚古墳発掘調査ワーキンググループ第2回会議資料	246

報道記事編

報道記事1	最先端技術駆使し調査	252
報道記事2	東塚2カ所に埋葬施設か	252
報道記事3	歴史遺産守るには	253
報道記事4	住民有志が展示室整備	253
報道記事5	北房・名所旧跡に道しるべ	254
報道記事6	来年度予算に準備経費	254
報道記事7	「真の遺産」へ住民動く	255
報道記事8	8史跡に案内看板	255

報道記事 9	真庭・荒木山古墳テーマに講演会	256
報道記事10	発掘調査へ予行演習	257
報道記事11	つれづれ	257
報道記事12	同志社大調査研と協定	258
報道記事13	荒木山古墳 守り伝えたい	258
報道記事14	「市民参画」に助言	259
報道記事15	発掘へ意欲高める	259
報道記事16	同志社大が研究室	260
報道記事17	“市民参画”発掘スタート	260
報道記事18	発掘の醍醐味触れる	261
報道記事19	発掘の面白さ触れる	261
報道記事20	住民参加型 発掘進む	262
報道記事21	発掘 大変だけど楽しい	262
報道記事22	荒木山西塚古墳 規模や構造は	263
報道記事23	石列や壺 熱心に確認	263
報道記事24	誇りを育む「真庭モデル」	264
報道記事25	目が離せない発掘調査	264
報道記事26	中 1 生厳選「岡山100名墳」	265
報道記事27	初のガイド養成講座	265
報道記事28	住民参加発掘 2 年目開始	266
報道記事29	古里の魅力全国に	267
報道記事30	新たな古墳の痕跡注目	267
報道記事31	滴一滴	268
報道記事32	古里学び魅力発信へ	268
報道記事33	往時の姿に思い巡らせ	269
報道記事34	住民参加の発掘 動画に	269
報道記事35	北房の魅力伝えたい	270

写真編

「まに大附属ふるさと研究所」プロジェクト A	272
「まに大附属ふるさと研究所」プロジェクト A 2	273
第 1 次発掘調査	275
第 2 次発掘調査	327

まえがき

本書は、岡山県真庭市^{まにわ}にある荒木山西塚古墳の発掘調査、およびその前後の文化遺産保護・活用に携わった多くの人たちが、汗と涙の軌跡を様々な立場から執筆したものをまとめた10年間の活動記録集です。地域住民、学校、行政そして大学が連携し、「官民学」が一体となつての取り組みは、協働の象徴ともいえる活動でした。現場では、専門家だけでなく、市民の皆さんや地域の子どもたちが共に土を掘り、記録し、古代の息吹を感じながら発掘作業を進めました。その姿は、この地域の文化遺産を未来へつないでいきたいという強い願いの表れであり、貴重な学びの場でもありました。

本書には取り組みの過程で得られた資料や記録、報道記事、そして多くの写真を掲載しました。前例がないが故の私たちの試行錯誤の活動が、文化遺産保護や活用を目指している皆さまに少しでも役立ち、さらに今後の取り組みの参考になればと願っています。また、文化資源を活かしたまちづくりに取り組む人びとにとって、新たな地域振興のヒントや励ましになれば、これほど嬉しいことはありません。

文化遺産は、地域のアイデンティティであり、未来への贈り物でもあります。しかし、それらを守り活かすためには、日々の積み重ねと不断の努力が欠かせません。私たち自身も、今なお試行錯誤を続けながら、文化遺産の価値を次世代へ継承するために奮闘しています。本書が、その歩みの一端を伝えるものとなり、さらなる活動の広がりへとつながることを願っています。

ここで、本書の構成を簡単に示しておきます。

第1章は、荒木山西塚古墳がある真庭市北房地域^{ほくぼう}に「荒木山の古墳を顕彰する会」（現「北房文化遺産保存会」）が誕生した平成28年（2016年）から、発掘調査が決定する契機となった「市長と話そう！」が開催された令和2年（2020年）までの経緯です。

この期間、真庭市教育委員会は、同志社大学津村准教授の協力を得て、文化財の保存・活用の担い手育成を目的とした北房公民館講座、「まに大附属ふるさと研究所」を開設します。「地域をいかに学び、いかに創造するか」を考え、演習した足かけ4年にわたる講座でした。この講座の開設中に行われたのが、太田市長と「荒木山の古墳を顕彰する会」の意見交換会、「市長と話そう！」でした。

第2章は、第1次発掘調査が始まる令和4年11月26日までの活動です。真庭市教育委員会・同志社大学、真庭市北房振興局、そして北房文化遺産保存会は、当初、それぞれの立場で検討を行っていました。その後、真庭市教育委員会から、保存会の役割案を含めた発掘調査の全体像が徐々に提示され始めます。そして、「官民学」全体を包括する組織体としての「西の明日香村コンソーシアム^{しゅうせむん}」に収斂していきました。

そこからは、コンソーシアム連携会議で密度の高い議論が重ねられ、第1次発掘調査に迫り着きます。

第3章は、ついに始まった発掘調査ですが、大きく3つの期間に分けられます。第1次発掘調査、第1次発掘調査終了後から第2次発掘調査が始まるまでの約11か月、そして第2次発掘調査です。

この章には、北房文化遺産保存会員をはじめ、一般参加者、サポーター、真庭市職員、その他の参加者から、荒木山で見たこと、経験したこと、感じたことを多数寄稿いただいています。また、真庭市立北房小学校・中学校の発掘作業参加および北房の魅力発信をテーマとした、同志社大学による「郷育^{きょういく}」実践もこの期間に行われました。

最終章の第4章では、発掘作業が終了して以降、北房文化遺産保存会が「西の明日香村づくり」に向けて本格的なスタートを切った2年間の活動、「西の明日香村コンソーシアム」の取り組み、そして同志社大学の北房小学校・中学校での新たな郷育実践活動を紹介します。

最後に、本書のキーワードの一つとなる「西の明日香村」について説明をしておきます。奈良県の明日香村^{いしづえ}といえば、6世紀末から7世紀にかけての飛鳥時代に、中央集権律令国家体制の礎が築かれた「日

本のはじまりの地」とされ、棚田や里山といった豊かな自然が広がる中に、有名な高松塚古墳や石舞台古墳などがある地域です。7世紀は古墳時代の終末期にあたりますが、それまでの巨大な前方後円墳は造られなくなり、身分に応じて墳墓の規模なども制限されていきます。墳形は方墳や円墳あるいは八角墳となり、規模も縮小化し薄葬化が進みます。

そうした時期に、北房地域で築造されたのが吉備で最も卓越した、破格の内容を持つとされる6基の終末期古墳、「大谷・^{おお}定^や古墳群」(国指定史跡)です。昭和63年(1988年)から大谷1号墳の発掘調査が始まると、この古墳が、大王(天皇)陵などごく一部の限られた人物しか築けなかったとされる、明日香村の岩屋山古墳の石室をモデルにしていること、同じく明日香村にある天武・持統天皇陵に比定される八角墳の野口王墓^{のぐちのおうのはか}と同じ5段築成の方墳であるといった特徴が明らかになっていきます。また、ほぼ完形の金銅装双竜環頭大刀、類例のない鍬形^なの金銅製品といった傑出した副葬品も出土します。こうして、大谷1号墳は畿内中枢と密接に結びついた古墳であり、築造時期から被葬者は、天武天皇がその死を悲しみ、諸王二位を贈ったと日本書紀に記される、吉備大宰石川王^{きびのおおみこともちいしかわのおおきみ}とする説も唱えられます。さらに、その後の定古墳群の発掘調査から、中・四国を視野に入れても例がない、7世紀の首長墓系列が存在していたことが判明します。被葬者は、6世紀半ば頃から吉備支配を進めた蘇我氏と強い結びつきを持っていた人物が想定されました。こうしたことから、当時、大谷1号墳発掘調査の事務局長(北房町教育委員会)でもあった久松秀雄氏(現北房文化遺産保存会名誉顧問・初代会長)は、明日香村同様、のどかな里山風景を持つ北房を、「西の明日香村」と呼び始めます。その後、平成9年(1997年)には、「北房町西の明日香村整備構想」まで企画されましたが、残念ながら立ち消えになったという経緯があります。

【嶋田有一郎・平城 元】